

# 「グロテスクな人々についての本」の語りの方略

野口 隆\*

## A Narrative Strategy in “The Book of the Grotesque”

Takashi Noguchi\*

### Abstract

Sherwood Anderson’s “The Book of the Grotesque” unifies the following stories in *Winesburg, Ohio* under the theme of grotesqueness presented in the old writer’s central thought in the story. But the story also requires the reader to believe in the thought even though it is ambiguous. “The Book of the Grotesque” achieves this by attributing the ambiguity to the narrator’s inability.

「グロテスクな人々についての本」(“The Book of the Grotesque”)は、シャーウッド・アンダソン(Sherwood Anderson)の連作短編集『ワインズバーグ・オハイオ』(*Winesburg, Ohio*, 1919)の冒頭の短編である。この短編は『ワインズバーグ・オハイオ』に収録される以前に、1916年に『マッセズ』(*Masses*)誌上で発表されている。ウィリアム・L・フィリップス(William L. Phillips)によると、「グロテスクな人々についての本」は、『ワインズバーグ・オハイオ』に収録された短編の中で最初にかかれたもので(20)、その重要性についてフィリップスは次のように述べている。

... the book was conceived as a unit, knit together, however loosely, by the idea of the first tale, "The Book of the Grotesque," and consisting of individual sketches which derived additional power from each other, not ... a collection of short stories which can be separated from each other without loss of effect. (18)

つまり、『ワインズバーグ・オハイオ』の個々の短編は冒頭の「グロテスクな人々についての本」によって示された思想によってまとめられ、一つの小説としても読めるような連作短編集となっているというのである。

「グロテスクな人々についての本」で示されている思想以外にも、さまざまな要素が『ワインズバーグ・オハイオ』を一つに結びつけている。例えば、ジェームズ・ネイジェルは『ワインズバーグ・オハ

イオ』を連作短編集として成立させている要素として、語り手、背景、モチーフ、ジョージ・ウィラード(George Willard)の成長の物語を挙げている(11)。

テキスト以外の要素——タイトル、献辞、目次、地図——もまた読者の読みを一定の方向に導き、『ワインズバーグ・オハイオ』にまとまりを与えている。例えば、『ワインズバーグ・オハイオ』というタイトルと本の冒頭に添えられたワインズバーグの町の地図は各短編に共通する同一の地理的背景を強調している。また、“To the memory of my mother, Emma Smith Anderson, whose keen observations on the life about her first awoke in me the hunger to see beneath the surface of lives, this book is dedicated” (22). という母親に捧げられた献辞は、この作品に含まれる短編が「人生の表面下を見たいという渴望」から生まれたものであることを示し、献辞と同じページの目次は、以下に続く短編がすべてそれぞれ一人の登場人物に焦点を当てて、その人生の表面下に隠されたものを描いていることを暗示している。

### THE TALES AND THE PERSONS

#### THE BOOK OF THE GROTESQUE

HANDS -- concerning Wing Biddlebaum

PAPER PILLS -- concerning Doctor Reefy

MOTHER -- concerning Elizabeth Willard

THE PHILOSOPHER -- concerning Doctor

Parcival

NOBODY KNOWS -- concerning Louise Trunnion

(22)

実際には、"NOBODY KNOWS – concerning Louise Trunnicion" とあっても「誰も知らない」という短編はルイズの「人生の表面下」についてほとんど何も語っておらず、むしろジョージの成長の物語の一つなのだが、献辞と目次は、次に読者が目にする「グロテスクな人々についての本」に示される思想と共に、『ワインズバーグ・オハイオ』という作品全体に統一感を与えている。

上に引用した目次からも分かるように、冒頭の「グロテスクな人々についての本」は、以下に続く短編とは明らかに扱いが異なっている。第一に、「グロテスクな人々についての本」には中心となる登場人物の名前がない。また、1919 年に出版された初版では、冒頭に「グロテスクな人々についての本」のテキストがあり、その後に『ワインズバーグ・オハイオ』というタイトルがあり、さらに「手」以下の短編が続くという構成になっていたことが知られている (Small, 16)。また、フリップスが述べているように、「グロテスクな人々についての本」で示されている思想は以下に続く短編の一つにまとまりを与えており、ほとんどの批評家は「グロテスクな人々についての本」は『ワインズバーグ・オハイオ』をまとめる序言のようなものと見なしている (Small, 17)。

「グロテスクな人々についての本」で示されている思想は、作中で老作家が書いた未刊行の「グロテスクな人々についての本」の中に書かれていたとされる。その老作家は、「夢ではない夢の中で」「これまで自分が知り合ってきた男女のすべてがグロテスクな姿になってしまっている」行列が目の前を通り過ぎて行くのを見る。そしてその中の一人に深く感銘を受けて「グロテスクな人々についての本」を書き上げる。そしてその本を読んだ語り手は、そこに書かれていた「とても奇妙な中心的な考え」に「消し去りがたいような感銘をうけ」それを次のように説明している。

That in the beginning when the world was young there were a great many thoughts but no such thing as a truth. Man made the truths himself and each truth was a composite of a great many vague thoughts. All about in the world were the truths and they were all beautiful.

The old man had listed hundreds of the truths in his book. . . . Hundreds and hundreds were the truths and they were all beautiful.

And then the people came along. Each as he

appeared snatched up one of the truths and some who were quite strong snatched up a dozen of them.

It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood. (25-26)

ここで語り手が説明する老作家の「グロテスクな人々についての本」の中心的な考えとは、人がある真実を自分のものとして、それにしたがって生き始めると、人はグロテスクになってしまうというものであろう。語り手が、この老作家の中心的な考えのおかげでそれまで理解できなかった多くの人やものを理解できるようになったというように (25)、「グロテスクな人々についての本」に続く短編の中心人物をこの考えに当てはめて理解することは可能である。

例えば、「手」では、同性愛者と誤解され職を追われた元小学校教師のウイング・ビドルボウム、なぜ自分が 20 年前にペンシルバニアの小学校を追われることになったのかよく分からないが、「自分の手のせいだと感じた」せいで、本来は彼が言葉では表現できない気持ちを伝える手を封印してしまったせいで、ワインズバーグに 20 年も住んでいながら話し相手はジョージ・ウィラードだけという孤独なグロテスクになったと読むことができる。

また、「紙の玉」に登場する「妻の死後は、誰も来ない診療所のクモの巣だらけの窓のそばに座り」(35)、「10 年間も同じ服を着ているので、袖はほつれて、膝や肘には穴があいている」(35-36) リーフイ医師は、外見的には明らかにグロテスクではあるが、自分の考えを紙切れに書き付けてはそれをポケットに詰め込んで紙の玉になると捨ててしまうリーフイ医師は、一つの真実を自分のものと見なしてそれにしたがって生きるという姿勢とは正反対であり、老作家と同じくグロテスクからはもっとも遠い存在である。

このように、「グロテスクな人々についての本」の語り手が語る老作家の中心的な考えにしたがって、『ワインズバーグ・オハイオ』の短編の多くの登場人物を理解することは可能だが、一方で「彼の主張は、'truth' を作る 'Man' と、それをゆがめる 'the people' の違いなど曖昧なところがある」(164) と渡辺利雄が述べているように、ここでの語り手の説明

は老作家の中心的な考えの明確な説明とは言いがたい。この曖昧さを“the ideas the author is trying to express have not been completely formulated” (Asselineau, 325) とアンダソン自身の考えの曖昧さを原因と考える批評家もあり、その可能性は否定できないものの、この曖昧さは「グロテスクな人々についての本」に限ったものではない。

花岡秀が指摘しているように、『ワインズバーグ・オハイオ』という作品の舞台となるオハイオ州ワインズバーグという架空の町は、「テキストを読み進むにつれて、町およびその周辺の大まかな地形はもろんのこと、その歴史の概略までもが浮かび上がってくる」(115)。つまり、『ワインズバーグ・オハイオ』の語り手は、そういった物語世界内の地理的・歴史的な事実に関しては具体的かつ明確で信頼できる語り手である。しかし、上に引用した老作家の中心的な考えを説明した部分に見られるように、話が「真実」に関わると途端に曖昧になってしまう。例えば、ジョージの成長の物語の一連の短編のクライマックスともいえる「成長」(“Sophistication”)は、次のような言葉で締めくくられる。

For some reason they could not have explained they had both got from their silent evening together the thing needed. Man or boy, woman or girl, they had for a moment taken hold of the thing that makes the mature life of men and women in the modern world possible. (243)

ここで「現代社会で男や女が成熟した生活を可能にするもの」というのは人がそれによって生きることのできる一種の「真実」だが、ジョージと彼の幼なじみのヘレン・ホワイト (Helen White) がそれを手にすることができるのは「ほんの一瞬のこと」であり、そもそもそれが何であるか明確に語られてはいないのである。

これまで述べてきたように「グロテスクな人々についての本」は、『ワインズバーグ・オハイオ』という作品全体に対する序言のような役割を果たし、以下に続く短編の解釈の鍵となるような老作家の思想の概要を読者に伝えているが、それと同時に作品に大きな制約を課しているともいえる。老作家について語り手は以下のように述べている。

You can see for yourself how the old man, who had spent all of his life writing and was filled with words, would write hundreds of pages concerning this matter. The subject would become so big in

his mind that he himself would be in danger of becoming a grotesque. He didn't, I suppose, for the same reason he that he never published the book. It was the young thing inside him that saved the old man. (26)

ここにも曖昧な部分はあるものの、その老作家がグロテスクにならなかったと語り手が考える理由が、作家がその本を出版しなかった理由と同じであり、彼の中の若いものが作家がグロテスクになることから救ったということは、それがおそらくは芸術的創造性の隠喩であることを考えると、老作家が彼の「グロテスクな人々についての本」を出版しなかった理由は、彼の芸術的創造性が常に彼の「グロテスクな人々についての本」の中の人々をグロテスクにする真実についての理論を更新するために、彼の「グロテスクな人々についての本」が完成することがなかったからであろう。

すると、アンダソンの「グロテスクな人々についての本」の出版は、ある種の自己矛盾ともいえるのだが、それを避けるために言葉を尽くして真実を作品の中に固定してしまうのではなく、人がそれにしたがって生きることができる真実と呼べるようなものほど、曖昧に語っているのだ。しかし、その内容は曖昧にしか語ることができない一方で、老作家の思想が存在したことや、ジョージとヘレンが一瞬の真実をつかみ取ったという事実は読者に信じてもらう必要はあるため、語り手の信頼度を調整し、その曖昧さの原因を語り手に帰するという戦略を用いている。

ミーケ・バル (Mieke Bal) によると、語り手についての重要な区別は語り手が自分の語る物語に登場人物として登場するかどうかであるが (20-21)、「グロテスクな人々についての本」の語り手は、物語世界外的語り手である。このタイプの語り手は物語内の利害関係に無関係なため一般的には最も信頼できる語り手である。また、語り手＝焦点化子の外的焦点化と、老作家＝焦点化子の内的焦点化の両方が採用されているため、いわゆる全知の視点——神の視点——からの語りとなっている。したがってこの語り手は老作家が、もしくは彼の中の若いものが、夜ベッドに横になって心の中で考えることを、説得力を持って語ることができるのだが、そこで彼と同じく物語世界外にいるはずの聞き手に向かってこう語る。

And then, of course, he had known people, many people, known them in a peculiarly intimate way

that was different from the way in which you and I know people. (24)

ここで大切なことは、おそらく、語り手が人格化されたことである。それと同時にいわゆる全知の視点からの語りの持つ信頼性を手放したのである。語り手が人格化されたからといっても、物語外的語り手でなくなるわけではないので、物語内世界の利害関係によって認識がゆがめられるという可能性は少ないが、人格化されたことによって人間ゆえの認識や表現の限界といった可能性が生まれる。例えば、上の引用部の直前ではあるが、作家の中の若いものを次のように語っている。

He was like a pregnant woman, only that the thing inside him was not a baby but a youth. No, it wasn't a youth, it was a woman, young, and wearing a coat of mail like a knight. (24)

また、別のところでは、同じものを “the young indescribable thing” (24) と語っているが、これは語り手の人間故の認識の限界のために、認識が次々と改められるという形をとりつつ、この老作家のなかにあるものを単なる芸術的想像力などといった陳腐な言葉で固定化してしまうのを回避しているのだ。

さらに老作家の「グロテスクな人々についての本」の中心思想を語る場面では、老作家を焦点化子にするという選択肢もあるにもかかわらず、語り手を焦点化子としている。もし、老作家を焦点化子としていたら言葉を尽くして明確にその思想を語ることになっただろうし、もし明確に語るができないとすれば、それはそもそも思想と呼べるようなものですらなかったということになっていただろう。しかし、実際の語りでは上の引用からしばらく姿を現さなかった “I” “my” “me” などの一人称の代名詞が頻出し、“The thought was involved but a simple statement of it would be something like this.” (25) と述べた後に、老作家の中心思想を語り始める。これはこの説明に曖昧な点や矛盾があっても、それはこの思想に問題があるのではなく、それを語る語り手の能力に問題があるのだと述べているようなものである。しかし、それは同時に、語ってはならないものを語るための一つの方略なのである。

### 参考文献

花岡秀：『ワインズバーグ・オハイオ』の空間とグロテスクな人々」、高田賢一・森岡祐一編『シャ

ーウッド・アンダソンの文学』、pp.115-30、(1999)

渡辺利雄：『講義アメリカ文学史』（第2巻）(2000)

Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio: Text and Criticism*. Ed. John H. Ferres. New York: Viking, 1966. Print.

Asselineau, Roger. “Language and Style in Sherwood Anderson’s *Winesburg, Ohio*.” Trans. John H. Ferres. *Anderson* 318-329.

Bal, Mieke. *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. 3rd ed. Toronto: U of Toronto P, 2009. Print.

Nagel, James. “The American Short Story Cycle.” *The Columbia Companion to the Twentieth-Century American Short Story*. Ed. Blanche H. Gelfant and Lawrence Graver. New York: Columbia UP, 2000. 9-14. *Questia*. Web. 11 Oct. 2010.

Phillips, William L. “How Sherwood Anderson Wrote *Winesburg, Ohio*.” *American Literature* 23 (March 1951): 7-30. Rpt. in *Sherwood Anderson: A Collection of Critical Essays*. Ed. Walter B. Rideout. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1974. 18-38. Print.

Small, Judy Jo. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Sherwood Anderson*. New York: G. K. Hall, 1994. Print.